

BEST OF キラリ 2023

月	名前	選出理由	事例内容(概要)	事例で一番伝えたいこと	推薦者
7月	安齋 千聖さん  柳原病院看護部	I「民医連の目指す看護の基本となるもの」の評価視点である以下の3点が特にすばらしくBESTOfきらりに認定しました。 ①患者の見方・捉え方: 患者観: 患者を個人として尊重され生きる権利が保障される存在であると捉えたか ②患者の視点: 患者の立場に立つ: 患者の状況や訴えなど事実をありのままに捉え、想像力を働かせて理解し、共感する ③患者の潜在的・顕在的な要求を引き出し、受け止め、その実現に向けて取り組む II 患者の一部だけを捉え判断するのではなく、患者の一言から患者の力を見出し、生きる力を引き出すことができた。また、患者自身で意思決定する支援ができた事例。	心不全で入院した90代の女性。元々食事摂取量が少なかったが、入院してからさらに食事が減少していた。全粥が提供されていたが、復食を含めても数口のみ摂取だった。夜勤時に患者から「おにぎりが食べたい」と要望があった。夜勤食の米飯でふりかけのおにぎりを作り提供すると全量摂取できた。その後、食事をおにぎり食に変更し、2〜3割摂取できるようになった。「おにぎりが大好きなの」と笑顔で話していた。	食事摂取量が少ない場合、付加食品を付けることがあるが、まず本人に嗜好品を確認していれば、食事摂取量も前から増やせたかもしれない。食形態を上げて嗜好品に合わせることは難しいこともあるが、嚥下状態を評価してチャレンジしていくことが必要だと学んだ。	小野 寺師長
8月	大橋 貴恵さん  柳原病院看護部	看護の視点・優点(実践の評価)の視点、患者の立場にたつという点で選出しました。 ①患者の状況や訴えなど事実をありのままにとらえ、想像力を働かせて理解し、共感する。 ②患者の病態、生活史、労働史、環境を重ねて理解し、共感するという視点です。	患者は、胸のしこりを自覚し、当院を紹介され受診。悪性との診断で、手術を希望し術前検査を外来で受けることになる。MRI検査を受ける日に、検査の案内・付き添いを行うことになった。検査に行く際、患者の表情が硬く、不安な様子で体が硬くなり少し震えていた。検査中は声をかけ、そばにいたいことを伝えた。終了後には、笑顔を見せてくれた。	外来患者とのかかわりは短い時間にかかわることが多いが、痛みや不安を抱えながら来院されるため、患者一人一人の思いに寄り添って、思いやりをもち看護を行えるようにしたい。その関りが、大切ということ学んだ。	飯村 主任
9月	牛込 幸代さん  柳原病院看護部	「民医連のめざす看護の基本となるもの」の看護の視点・優点のうち、以下の2点が特に素晴らしく、ベストオブきらりに認定しました。 ①患者の状況や訴えなど事実をありのままに捉え、想像力を働かせて理解し、共感するという「患者の立場に立つ」視点 ②患者の潜在的・顕在的な要求を引き出し、受け止め、その実現に向けて取り組む「患者の要求から出発する」視点	乳癌患者。リンパ浮腫により片手が浮腫著明。常時着圧手袋をつけていた。思うように体が動かせない状況になっていく中、なるべく自分で行おうとする姿勢が強かった。遠慮することもあった。清拭を行った際、着圧手袋を自身で交換できなくなっている状況に気づき、本人は遠慮して「次に息子が交換用を持ってきてからで良いわよ」と言ったが、清拭をして乾燥させた皮膚にクリームをつけ保湿した後、弾性包帯で巻くと、「こういう方法もあるのね。ありがとう」と喜んだ。	患者にとって、少しでも苦痛を取り除くことができ、心地よいと思ってもらえるような看護を続けていきたい。	伊藤 師長
10月	渋谷 果世さん  柳原病院看護部	I「民医連のめざす看護の基本となるもの」の評価視点である以下の3点が特に素晴らしくベストオブきらりに認定しました。 ①看護の視点: 患者の状況や訴えなど事実をありのままにとらえ、想像力を働かせて理解し、共感する ②患者の見方捉え方: 人間は、さまざまな制限に対して能動的に働きかけ、変わることができる存在であると捉えたか ③患者とともにたたかう: 患者の生命力を高め、健康回復のために課題を共有し克服できるよう支援する II 入院患者さんの思いを見逃さずに対応出来た事例	88歳男性。進行胃がん。多発転移あり。入院中は腫瘍に伴う低血糖症状を繰り返しており、数時間毎の血糖チェックを実施していた。日勤帯の勤務の時に、他看護師より、「足の浮腫が一番つらい」と言っていたと報告を受けた。そこで、足の循環を良くするために足浴を実施した。足浴中は患者の話に耳を傾けていた。患者より「転院先がなかなか決まらなくて、先生に見捨てられちゃったかな」と不安な様子であったが、終わった時には、「ありがとう」という言葉を頂いた。仰臥位になった時には、ベッドの足元にクッションを持って行き、足を挙上するように説明した。	患者の発言を聞き、そのために何ができるだろうか、考えて看護することを手をういたケアをすることで、患者の気持ちをさらに引き出すことが出来ること 忙しい中でも患者の気持ちを考え行動できるようにしたいこと	吹田 看護部長
月	名前	選出理由	事例内容(概要)	事例で一番伝えたいこと	推薦者
11月	遠西 昭美さん  柳原病院看護部	1.「民医連のめざす看護の基本となるもの」の評価視点である以下の3点が特に素晴らしくベストオブきらりに認定しました。 ①患者の見方・捉え方: 患者を個人として尊重され生きる権利が保障される存在であると捉えたか。 ②看護の視点: 患者の生命力を高め、健康回復のために課題を共有し克服できるよう支援する。 ③看護の視点: 患者の潜在的・顕在的な要求を引き出し受け止めその実現に向けて取り組む。 II. 入院生活にもその人らしい日常を取り入れ、患者を笑顔に出来た事例	コロナ罹患後から、ADL低下による体動困難あり褥瘡が出現し悪化、同居家族も陽性後に入院等なり、家族の介護困難にて当院へ救急搬送(待期間後)。当院にパーキンソン病で通院していた。見当識障害はあるが、明るい声であいさつするとおはようと優しく返事してくれる。保清のベッドパスの時に使っていない暖かいタオルで患者の耳や頭を拭いていたら「気持ちがいいありがとう」手をたたいて喜んでくれた。	1人1人に十分な時間はとれないが、患者さんを1人の個としてとらえ、必要に応じて体だけでなく頭を拭いてあげるなど、なるべく細かいところもケアしていきたいと改めて気づくことができた。	菅原 師長

<p>12月</p>	<p>庄司 沙央梨さん</p>  <p>柳原病院看護部</p>	<p>1.「民医連のめざす看護の基本となるもの」の評価視点である以下の3点が特に素晴らしくベストオブキラリに認定しました。 ①看護の視点:患者の状況や訴えなど事実をありのままにとらえ、想像力を働かせて理解し、共感する ②看護の優点:看護の「継続性」「総合性」を一貫して追求している ③組織外の様々な職種と連携し、患者を支援している</p>	<p>下肢骨折の診断となった男性。脳梗塞の既往もあり独居。生活についての不安があったが、ベッド満床のため帰宅となった。歩き方や入浴方法、固定の仕方について記載したメモを作成し渡すことで、「これがあれば安心」と言い自宅で過ごすことが出来た。付き添いのなかった家族へも包帯の巻き替え方法を伝えることが出来た。ケアマネージャーへ在宅でのサービス調整もお願いした。</p>	<p>帰宅後のことも考えて、安心できるようサポートしたいと挙げている。外来での関わりはとても短い時間だが、患者の個別に適したサポートを提供することができた。</p>	<p>築瀬主任</p>
<p>1月</p>	<p>渡邊 優美さん</p>  <p>柳原病院看護部</p>	<p>1.「民医連のめざす看護の基本となるもの」の評価視点である以下の3点が特に素晴らしくベストオブキラリに認定しました。 ①患者の見方・捉え方:人間は様々な制限に対して能動的に働きかけ、変わることが出来る存在であると捉えたか ②看護の視点:患者の状況や訴えなど事実をありのままに捉え、想像力を働かせて理解し、共感する ③患者の要求実現を妨げる要因を明らかにし、それを取り除くために取り組む</p>	<p>胸腰椎多発骨折にて体動時疼痛増強あり、自己体動できず、ギャッジアップ不可であった患者。 そのため毎食側臥位で食事摂取をしていた。食事前のポジショニング時、疼痛増強しないよう体動に合わせて深呼吸促し、本人のペースに合わせて実施すると、スムーズにポジショニングを行うことが出来た。 また、「いつもご飯が見えなくて食べ辛い」との訴えあり、食器の配置を変え、全て手の届く位置に介助。その結果「全部見える。自分で食べられそう」という発言を得ることができた。</p>	<p>業務が重複している時など患者のペースに合わせてくれることを忘れがちになるが、患者の状況に合わせて介助方法を実践することで安楽に過ごせるような関わりが重要と再認識する事が出来た。</p>	<p>関主任</p>
<p>2月</p>	<p>藪野 真夕さん</p>  <p>柳原病院看護部</p>	<p>1.「民医連の目指す看護の基本となるもの」の評価視点である、以下の3点が素晴らしくベストオブキラリに認定しました。 ①人間は様々な制限に対して能動的に働きかけ、変わることが出来る存在であると捉えたか。 ②患者の状況や訴えなど、事実をありのままに捉え想像力を働かせて理解し・共感する ③患者の潜在的、顕在的な要求を引き出し受け止め、その現実に向けて取り組む</p>	<p>体動困難・腰椎圧迫骨折で入院した87歳女性。歩行、立ち上がりなどしっかりしており、ポーダブルトイレ一部介助で行っている為リハビリ病院転院方向だった。認知症もあり指示が入りにくく、ベッド上で四つん這いになったり、体幹すり抜ける危険行動が目立ち、連日の抑制で不眠・不隠が続いていた。過度な抑制が原因ではないかと考え、体幹抑制をいったん解除し、センサー対応に変更した。窮屈さが軽減されたためか、トイレに覚醒するが不眠・不隠は軽快した。</p>	<p>看護師側の都合で抑制する事が多いが、患者のADL、何をしたいのか、なぜ不隠なのかをアセスメントし患者個人のニーズに合わせて、生活リズムを作り入院生活をストレスなく遅れるカギとなる。このニーズを大事にしたい。</p>	<p>中村主任</p>
<p>3月</p>	<p>関 由香里さん</p>  <p>柳原病院看護部</p>	<p>1.「民医連のめざす看護の基本となるもの」の評価視点である以下の3点が特に素晴らしくベストオブキラリに認定しました。 ①患者の見方・とらえ方:医療は患者と医療者が対等・平等の関係で協力しあうこと成り立つと認識したか。 ②患者の見方・とらえ方:医療は患者の主体的な参加によって成り立つと認識したか。 ③看護の視点:患者の潜在的・顕在的な要求を引き出し、受け止め、その実現に取り組む。 2.その状況から逃げずに、患者への気持ちの良いケアを提供しながら、思いを引き出し、患者の要求の実現に取り組もうとした事例</p>	<p>肺膿瘍で治療後、リハビリ目的で入院した73歳男性。 入院当日から看護師に対し、「気が利かない、この女はみんな失礼」などと、何かにつけ看護師に対し否定する言動が聞かれていた。そのため看護師もかかわりに抵抗を感じているようだった。 入院7日目、リハビリの予定時間が変更になってしまったことで、自らリハビリをキャンセルしたとの情報があった。 髭が伸びていたため、髭剃りをしながら患者本人の考えや思いを傾聴したことで、リハビリを時間通りに実施してもらいたいこと、自分の考えは世間一般より正しいと思っている事など、患者の思いを引き出すことができた。その後笑顔も見られるようになり、少しずつ自分でできることを増やしていこうと伝えると、「はい」という言葉を聞くことができた。</p>	<p>逃げずに信頼獲得のための方法を模索していくことが大切であること。その時に自分のかかわりで達成することが出来なくても、そこで得たものをチームで関わっていくことで、いつか信頼を獲得できると信じている。</p>	<p>加藤副看護部長</p>